

木古内沖座礁から140年

咸臨丸最後の航海に迫る

町民有志、研究書復刊へ

【木古内】幕末の軍艦「咸臨丸」が町内サラキ岬沖で座礁、沈没してから今年で140年となるのを記念し、町民有志でつくる「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」は同船の「最後の航海」の実相に迫る歴史研究家塚本謙蔵さん(78)＝札幌市＝の研究書を復刻させる。「咸臨丸、北へ」との題名で、9月上旬にも発行する。(大城道雄)

咸臨丸は江戸幕府の発注でオランダで建造され、太平洋横断の快挙を成し遂げた軍艦。戊辰戦争で幕府脱走軍の艦隊に使われ、最後は開拓使の輸送船となった。

座礁事故は1871年(明治4年)に発生。仙台藩白石の北海道移住団401人を乗せて

函館から小樽に向かう途中、サラキ岬沖で暗礁に乗り上げた。ただ、座礁の原因が諸説あるなど謎が多い。

塚本さんは札幌白石高の地理教諭時代の1977年ごろ、咸臨丸に興味を持って調査を始めた。公文書には乗員は全員無事と記されてきたものの、サラキ

岬近くの大泉寺の「過去帳」に乗船者の名前を見つければ、死者が1人いたことを突き止めた。

塚本さんは「過去の文献には一切書かれていなかった事実。本当に驚いた」と振り返る。塚本さんは93年、こうした事実や咸臨丸の歴史、仙台藩片倉家の移住の経緯などをまとめた「『咸臨丸』最後の乗船者」と題した研究書を300部自費出版した。

しかし一般の人の目に触れる機会は少なかったため、「夢みる会」は同書を改題し、500部発行することにした。A5判、240ページ。税込み2千円。9月24、25日の「咸臨丸全国まちづくりサミット」などの記念行事の会場でも販売する。

同会は「謎に包まれた咸臨丸の晩年が克明に描かれている。多くの人に読んでほしい」と話している。

問い合わせは町観光協会 ☎01392・22046へ。



校正中の研究書(右手前)を前に、咸臨丸の魅力を語る塚本さん＝札幌市内